

第4章 自己を語り、他者とつながるよろこび

第1節 主題設定の理由に教師自身を綴る意味

全体学習の取り組みは、まさしく教師自身が解放され、一人一人の生徒と、人間として生きる「よろこび」を共有する営みである。その取り組みについて、板野中学校の実践記録の中に次のような記述がある。

☆人権・部落問題学習の基本的な構え

※「教職員の姿勢が生徒を変える」

—教職員自らが部落差別との出会いをみつめ、部落問題との関わりを語ることから—

○被差別の立場の側に立ちきろうとすること

- ・被差別の親や子どもの願いや思い、生き方に寄り添うこと
- ・被差別の親や子どもの側から学校・学級、社会をみるとこと

○自らの差別意識を克服すること

○自らの生き方に誇りを持つこと

○差別をなくすという確信に自信と熱を持つこと

誰にも部落差別との出会いがあり、何らかの形で部落問題と関わって生きてきた。私たちは差別構造の中で、まさに空気を吸うように差別意識を植えつけられてきた。部落差別が今も厳しく存在する現在において、自らの差別意識をどう克服し、変容させてきたのか、さらに同和教育にどう取り組んでいこうとしているのかをみつめ、自らの生き方を正していくことが部落問題を自分のものとし、人権・部落問題学習をすすめる上での基本となる。差別解消に向け、今私たちは何をしているのか、何ができるのかを問い合わせ、部落差別解消に取り組む教職員の姿勢そのものが、本物の人権・部落問題学習を作り上げ、生徒を変えていくといつてよい。

このように私たち教職員は、部落問題とかかわる中で、私たち自身の中にある、あるいは私たちの生活の中にある差別をみつめ明らかにし、明らかになったことを生徒に問い合わせ、私たちのありのままをさらけ出し、語り続けることが常に問われている。こうしたことが本物の人権・部落問題学習をつくり上げていくということを忘れてはならない。

☆人権・部落問題学習のすすめ方

① 語り合い学習

素直に語る・本音で語ることから→連帯意識の高揚→課題解決へ

ア 何でも語り合える人権・部落問題学習

→被差別の立場にある生徒が思いを発言できる人権・部落問題学習であること

- ・教師が日常的に人権問題・差別問題を語っていること
- ・被差別の生徒を中心とした学級づくりがなされていること
- ・常に本音が語られていること
- ・常に一人一人の意見が大切にされていること

イ 生活や仲間づくりと結合した人権・部落問題学習

- 自分自身の内面や身近な生活をみつめていくことができる人権・部落問題学習であること
- ・身近な問題であり、また、展望のもてる学習資料であること
 - ・あゆみや生活ノートを活用しながら、常に自己の内面や行動を点検させること

教職員が自分をさらけ出し本音を語ることによって、生徒もその思いにふれたとき初めて語りはじめる。本音をぶつけなければ本音は返ってこない。思いを込めなければきれい事に終始する。この認識に立って話し合い活動を中心に授業は進められるべきである。単に資料の読み聞かせや価値観の押しつけにならぬよう、最も言いにくいうことが言い合える関係ができるこそ信頼関係が生まれ、本当の人権・部落問題学習となっていく。

支え支えられるといった関係、すなわち人間解放を共に成し得ようとする連帯意識は、教師も生徒も自分自身を語ることによってこそ育てられる。何でも言い合える学級が基盤になれば人権・部落問題学習も深まらず、様々な疑問や自らの課題を残したままの人権・部落問題学習では差別解消の力は育たない。

このようにろこびも悲しみも共にわかち合える学級を基盤にして、語りはじめた生徒の発言の中にある疑問や課題をみんなで考え、みんなで意見をぶつけ合う中で、差別解消の力を育てていきたい。部落問題で悩む生徒、いじめで悩む生徒、学校に来られない生徒、学力・進路で悩む生徒など、学級全員が一つとなり部落問題を自らの問題として捉え、これらの課題に取り組むことが人権・部落問題学習である。

以上が板野中学校の実践記録の記述である。そこに流れる考え方とは、教師自らの解放を原点にして取り組んでいくことになる。この視点に立って綴られた2人の仲間の主題設定の理由を引用させていただく。

全体学習と私、教師自身に問われること

三木 健司

板野中学校の先生方や生徒たちと、全体学習などのいろんな場面で話し合う中で、わかったことがある。それは、「語る」ということの重要性である。

「人権・部落問題学習において、生徒たちから意見を引き出そうと思えば、まず教師が自らの部落に対する『思い』を語っていくことだ。それをしないと、生徒たちは、自分の底にある本音の部分や言いにくい部分をみんなの前で言えるはずはない。教師が自分を出していかないと、生徒たちの本音の部分は聞けない。自分自身が今まで出せなかつた部分を出して変わっていくことで、生徒たちも変わっていける。つまり、人権・部落問題学習は、教師が変わっていくための学習であり、そこから生徒たちがどう変わっていくかという学習である。」

そんな全体学習に対する説明をはじめて聞いた時、自分にこんなことができるのか、今までどんなに親しくしてもらった人にも言えなかつたことを生徒たちの前で言えるのだろうかという不安、

それを言ったところで本当に何かが変わっていくのだろうか、それどころか信頼をなくすことになりはしないかという疑心暗鬼の気持ちでいっぱいになっていた。

また、全体学習の後の研修会で言われた言葉が、今も心に強烈に残っている。

「先生方は自分の専門の教科があって、その免許があるから、その授業をプロとしてやっている。では、部落問題についてはどうだろうか。どの先生が部落問題を教えてもいいという免許を持っているのか。みんな無免許で部落問題の授業をしているのだから、中途半端にやってもらうと、差別を増やしていくだけになってしまう。」

私には、人権・部落問題学習を授業していく資格があるのだろうか、涙が出そうなほど考えさせられた強烈な言葉であった。しかし、担任として、資格があるか、ないかを考えている場合ではない。我がクラスにいる部落差別に苦しんでいる生徒を解放していかなければならない。そのためには、自分自身を解放していかなければならない。それが、そのときに出した自分の答えであった。そのために、まず、私自身をみつめ、私自身を語ることから始めたいと思う。

私は北島町生まれで、対象地域のないところで育った。小さい頃は「部落」という言葉や、どこが部落であるかということは知らずに育った。しかし、祖父や祖母からは、「遠くの方には恐いところがあるんでよ」と言われた記憶がある。

小・中・高・大と進学するにつれて、いろいろ人権・部落問題学習の授業を受けてはきたが、そこで身につけてきたものは、「差別はいかん」ということだけのように思う。学習会が行われているということを知ったのも教師になってからである。

今年、板野へ赴任するとき、母に、「〇〇へ渡る橋は通られんでよ、道が狭いけんな」と言われた。何を言っているのかはすぐにわかる。

「なんで。」

「事故したら困るで。」

「事故はどこでしても困るで。おかあはんは部落の人と事故するなってことを言よんだったら、それは大きな間違いでえ。部落の人が部落しか通ってないか。どこでも通りよるし、部落の人とどこで事故するかわからん。だいたい部落の人であろうがなかろうが、事故はしたら困るんでえ。」

「健司は世間を知らんからそんなことが言えるんよ。部落の人は集団になってやってくる。恐いんですよ。」

「おかあはん、おかあはんは部落の人と事故したんで。」

「□□のおっさんが事故したとき、ほんまに困ったって言よったでよ。」

「でも、それは聞いた話だろ。みんながそうやって聞いた話を信じて偏見をふくらましていくから、部落の人と関わると何言われるかわからんという理由で差別をするから、部落差別はいつまでたつてもなくならんのよ。」

「もうええわ。健司の好きにしい。でもな、事故しても知らんよ。そうやって心配して言よることを邪険にしたらええんじゃわ。」

というような話になって喧嘩になってしまった。今まで同じような喧嘩を何回もしてきた母親を通して、自分をみつめていきたいと思う。

つい最近まで、私の母は家政婦を職業としていた。母は同じ町内から、農家の長男である父の元へ嫁いできた。「家」を守っていくことに重きを置く祖父と祖母、兼業で農業を営む父の中で、時には外で働きながら、そして農業も父と共にしながら、私と弟の二人の息子を育ててきた。

多くの女性がそうだと思うが、私の母も「家」を背負い、嫁と妻と母という立場の中ですいぶんつらい思いをしてきた。私が高校1年の時から3年間の父親の入院があって、大学入試の時に父親は亡くなったのであるが、その間も、母は、父の面倒を見ながら、私や弟の世話を祖父や祖母の世話もこなしてきた。

その父の死の時ほど、両親のすごさを感じたことはない。私は、とにかく、家の状況がどうであろうと、大学へ進学するのは県外へと思っていた。県外で一人暮らしをし、自立して生活できることを証明するのだ、などと言って、本当は誰の目も何のしがらみもないところでのんきに、遊びながら暮らそうという甘えた気持ちであった。母は、父の入院があるからぜひ県内の大学へ、と私のその考えを許してくれなかった。それを高校3年の12月、共通一次テストも押し迫った頃に許してくれた。

「父ちゃんがな、健司の好きなようにさせてやれって。ほんまなら、わしが元気で仕事ができよったら、健司の好きなようにさせてやれるんやけど、苦労するんを承知でそうしたいんなら行かしてやれって言うてくれたんでよ。だから、共通一次が終わるまでは病院へ来んでもいいからな。勉強一生懸命しいよ。」

と言ってくれた。うれしくて舞い上がった。父の入院していた病院は私の高校への通学途中にあり、病院へ寄ることがそんなに時間的な負担になることもないので、その父と母の言葉に甘えていた。

父がガンであることは、私にも知らされていたのに…。

それで、年が明けて1月15、16日の共通一次テストの日までの1ヶ月あまり、病院へ父の様子を見に行くこともなく、勉強に明け暮れた。テストが終わり、久しぶりに父の様子を見に行くと個室へ移っていた。ドアを開けて父の姿を見るなり、涙が出てきた。このあいだ見たときは全然様子が違っていた。

「父ちゃん、今テスト終わってきたよ。」

うつろな目で父はうなずいた。私は思った。

「父がこんなに苦しんでいるのに、僕は何を甘えたことを言っているんだろう。病院へ来んでもいいっていうんは、父の悪くなっていく姿を見せては大事な時期に勉強に集中できんようになるという思いやりだったんだ。それに甘えて、僕は自分のことしか考えてなかつた…。」

生まれてこれだけ泣いたことがないくらい、涙が出て止まらなかつた。

「父ちゃん、母ちゃん、僕、徳大へ行くわ。ごめんよ。」

それから4日後の1月20日に父は亡くなった。父と母は、死による別れを前にしても、私にわがままを言わせてくれていたのである。

この後、母はこの3年間の病院での父の世話の経験をもとに、家政婦の仕事に就き、病院に入院しているお年寄りの面倒や病人の世話を本当に献身的にしていた。

最近は夜泊まり込んで仕事をするようなことはなくなっていたが、家政婦をし始めた頃は、よく

夜も泊まり込んで仕事をしていた。

病人の世話の仕事ばかりでなく、ホームヘルパーとして働くときもあった。父の死後十年あまり、嫁としての立場はそのままで、本当によく我慢し頑張っている。母のすごいと思うところはその家政婦の仕事に誇りを持っていたことである。

「この仕事は、お父さんを通して、神様が私に与えてくれた仕事かもしだんなあ。本当にやりがいのある仕事でよ。」

母はこう言っていた。全然この職業を恥ずかしいなんて思ってない。

私もこんな母をすごいと思う反面、母の職業を人に堂々と言えないと思う意識があった。これまで職場などで書いてきたいろんな書類の母の職業欄に、今は家でだれもやっていない「農業」と書いてみたり、母が昔やっていた「事務員」と書いてみたり、1回も本当の「家政婦」と書いたことはなかった。

自分の中に、この「家政婦」という仕事に対して恥ずかしいと思う気持ちがあり、それは、母はすごいと思う反面、差別しているのであるということによく気がついた。自分自身、母の仕事に対して差別意識があるにもかかわらず、母の部落に対する差別意識には腹が立つ。自分はつらい思いをしてきて、また病気でつらい思いをしてきた人とすいぶん接してきたはずであろうのに、なぜ部落差別でつらい思いをしている人がいることに関しては理解しようがないんだろうか。私がこういうふうに思うのは、教師という職業に就いていろんな差別問題に関わっているからなのだろうか。教師をしていなければ、母と同様の考え方をする人間になっていたのだろうか。

私が今まで自分で一番部落を意識したのは結婚の時である。それまでは、学生時代に部落問題の授業を受けても、教師として人権・部落問題学習の授業をしても、自分には関係のない遠いことのような捉え方をしていたように思う。人が部落の出身であろうがなかろうが、そのことが人を判断する基準にはならないと自信を持って考えていた。しかし、結婚しようと決意した時から、家族の誰から、「〇〇さん（私の妻をさして）は部落の人と違うんで？」と聞かれるのが非常に恐かった。

もし私の妻が部落の出身であれば、私は反対するであろう家族に対してどのように説得しただろうか。そして説得し切れただろうか。しかし、結婚式までに、また結婚式が終わってからも、そんな話は出なかった。妻の里は阿南なのだが、私の祖父、祖母そして母は、遠くの阿南のどこが部落で、どこが部落でないかというようなことを知っているのだろうか、私はそんなこと知らないのに、それとも聞き合せか何かをしたのだろうかと疑う気持ちになってしまう。

結局、私がこういうふうに考えていること自体が、私の部落に対する差別意識なんだと思う。私が育った家の中では、私だけは部落差別する人間ではないと思っていたが、部落を強烈に意識してしまう自分がいた。私はそのときまで、自分の差別意識をすべて家族に押しつけて、自分だけはきれいな人間だなどと、とんでもない思い違いをしていただけなんだと思う。こんな自分を変えていきたい。部落を意識しない人間になりたいと思う。

全体学習と私、教師自身の解放

山口 智恵子

私は、生徒たちに自分自身を語っていくことがまず一番だと思っている。自分の苦しかった部分を語る。父親に対する私の思い、家族の考え、結婚のこと、私自身の中にある卑屈になっている意識を洗い出さなければ、生徒といっしょには歩いていけない気がする。「教師にはプライバシーがないなあ」などと思ったこともある。しかし教師という以前に、一人の人間として、私自身がこの部落問題に取り組むことで、確かに心の中のわだかまりが少しづつ軽くなっていく。自分を語り、心から重いものをはき出していきたいと思う。

中学の時には感じなかつた「知られたくない」という気持ち…。私は、高校に入って自分というものをできるだけ隠すことを覚えた。小学校から今まで、ずっといっしょに過ごしてきた純朴で何もかも筒抜けでわかるという中学校時代の環境とは明らかに違い、私の家のこと、育った環境、どういう中学生だったかを誰も知らない世界で、私はだんだん装うようになった。

いわゆる「町の子」の多い高校で自由でのびのびとした明るさの中で、私の心は反対に何かを閉じこめていく感があった。

私のそれまで知らなかつた世界、音楽や映画いろいろな情報をいっぱい持つてゐる学級の友だちの中で、一生懸命背伸びをしている私があった。仲間に同化できるように表面で繕う、ふりをする私であった。時折学校の帰りに遊びに寄る友だちの家はどこも「町」を感じさせ、私にあこがれと羨望をもたらした。一方で卑屈になつていて私があったのだった。

表面上はわいわいと楽しくしているが、自分の心の中のことには触れない。そんな生活であった。3年生になり受験勉強で忙しくなるとなおさらのこと、もっぱら話題は勉強、進路…。

今から思うと真の友だちづきあいが高校時代できていたのだろうか。親しい友を家に呼べたのもずいぶん経つてからであった。それもその子が先に自分の家に呼んでくれて、ああこれなら私も呼べると思ってからだった。

「仲間につながろう」「仲間とともに」「仲間の大切さ」と仲間を連発する私の中に仲間に助けられた記憶がない、どんなに辛いことでも一人で耐えてきたようだ。しかしながら、耐えてきたのではなく、ごまかしや逃げがあったのではないかと思う。堂々とその壁にぶつからず乗り越えられず背を向けてきたのではないだろうか。あるいは私の苦しみなんていうのは取るに足らないものだったのかもしれないが…。

通学の列車に間に合わず、父親が送ってくれたことがあった。学校の門まで行ってやるという父親に、「ここから歩いていく」と言って通学している子の見あたらない、門からずいぶんと離れたところで車を降りた。父親には、「高校生にもなつて送つてもらつてと言わいたら恥ずかしいからここで降りる」と言ったが、本当はトラックから降りる私を見られたくないからであった。

ある朝のホームルームで教室に入ってきた先生がいきなり、「今から家の仕事を尋ねるから、該当するものに手を挙げるよう」と言って次々と職業を揚げていった。公務員、会社員、商業、建設業、農業いろいろあったと思うが、「農業」と言わされたとき私の手は金縛り状態であった。手が挙げ

られなかった。トータルをして数が合わないといらつくなつ先生が怒ったように、「もう一度やるからきちんと挙げろ」今度は職業を言って手を挙げた者の顔と名前をゆっくり確認するように調査していく。生徒たちまでが、あちこち見て挙げている者の顔を確かめるように私には見えた。

私は「農業」の所でそっと手を挙げた。無情にも先生は「はい、2名なつ！」と確認を取った。顔が真っ赤になつたように思つた。うつむいた顔をみんなから見られているように思つて、顔が上げられなかつた。私は家が農家であることを誰にも言ったことがなかつた。

自分の中に農業を劣等視するところがあつた。自然を相手に身を粉にして働く尊い両親の姿を誇れない。泥がついたり、汗まみれになつて働く両親を「格好が悪い」と恥ずかしがる私であつた。

私のこういった意識はずつと心の中に巣くい、私を暗く卑屈にさせるものとなつていた。

これは明らかに私の偏見であり差別意識であつた。この意識が差別意識であること、部落問題と直結していることは、この学習に関わるようになつて初めて分かつたことである。

【先生のお父さんの話を聞いて少し私の思いと似ていると思つました。うちのお父さんも、勉強家で、私の教科書を見て知らないことを書いていたらすかさず、メモして勉強していました。だけど、お父さんの仕事は農業の機械を売る、なおす仕事でいつも作業服でいました。

それも車も仕事の車でちょっとそれが恥ずかしかつたです。しかもお父さんの働いている場所が通学路中にあつたので、クボタで働いているなんて言えませんでした。

幼稚園で遊んだ楽しかつた記憶はあんまりないので、仕事を聞かれた記憶ははっきりと残つています。他の子は消防署で働いているお父さんや、船長さんなどでうらやましく思つっていました。それにまずお父さんの名前（変わつた名前）が恥ずかしかつたです。

でも今は休みの日でも「機械なおして」って電話がかかってきて、それをなおしに行くお父さんが好きです。】

私もこの生徒のようにもつと早い時期にこの人権・部落問題学習と出会つて、自分の差別意識を洗う機会を持てていたら、ごまかしたりふりをしたりする自分でなく、もつとのびのびといきいきとした生き方ができていたのではないかと思う。今までの分を取り戻すためにも、より厳しく自分をみつめていきたいと思う。

社会を支える様々な分野で一生懸命働く姿を尊い姿と受け取れず、まちがつた世間体に流され自分を見失つてくる。社会の二重構造の中で、差別し差別されている中に自分がいることに気づかぬ。「自分には差別は関係ない」という人は、本当のことが見えていないことに気づく。

私自身も、教師となり生徒の進路に関わる中で「どの仕事も尊い」と言いながら、「とにかく勉強して点数を上げよう。勉強せんかったら高校に入れんよ」などという矛盾した教育をしてきた。こういったまちがつた、社会を見るものさし、価値観、教育観を変えていく取り組みをしていかなければならぬと思う。